

クラゲとくらす魚 A fish associated with jellyfish



クシクラゲの仲間（有櫛動物）を除けば、阿嘉島周辺の海で数cmを超える大型クラゲを見ることはほとんどない。これまで慶良間周辺において鉢虫綱（刺胞動物）で確認されているのは、タコクラゲ *Mastigias* sp. のほかわずかに3種だけであった。写真のクラゲはムラサキクラゲ *Thysanostoma thysanura*、慶良間で貴重な5種目の鉢水母になる。しかも、このクラゲにはアジ科の一種と思われる魚がついていた。クラゲの写真を撮ろうとカメラを構えると、間に割り込んできて邪魔をする。右から撮ろうとすると右に、左から撮ろうとすると左にやってきて、クラゲを隠してしまうのだ。ふつう刺胞動物と共生する動物は、その刺胞での保護を期待するため、刺胞動物に隠れてしまうものなので、この魚のようにあえて敵に体をさらしてくれるのは珍しい。けれども、ちょっと見てみると、すぐにその理由がわかった。この魚は、敵側に来ると同時にクラゲの縁を口でつくのである。すると、クラゲはそれと逆に（きつつつかれるのがいやなのだろう）曲がっていき、つまり敵から遠ざかる方向に変針するのだ。何度繰り返しても、この行動を行うのが観察された。この魚は、クラゲを危険のないところに誘導しているのである。その様子は、まるでクラゲを操縦するパイロットであった。

採集・撮影：岩尾研二
採集日：2005年8月9日
採集場所：阿嘉港

編集後記

編集 岩尾研二（研究員）

数年前「地球にやさしい」というフレーズが世の中にあふれていました。地球環境保全のためのキャッチコピーです。なぜ地球にやさしくして、その環境を保全するのでしょうか。それはきっと、人が豊かに生きるためではないでしょうか。つまり「地球にやさしい」ということは、「人にやさしい」、「自分にやさしい」ということです。ですから、環境保全というのは「自分が豊かになるために、がんばっていこう」という当たり前のことなのですが、なかなかそれが難しく、近頃はニュースを聞いていてもこの事に関しての明るい話題はほとんどありません。環境を保全するためには、自然科学だけでなく、人文科学、社会科学的なアプローチが不可欠なのにも関わらず、特に日本では、これまではどちらかというとな自然科学的なアプローチばかりが数多く見受けられました。これからはさらに、サンゴ礁と人とのつながりが解き明かされなければならないでしょう。時代の要請でしょうか、今号には、そうしたサンゴ礁と人とのつながり方を考えた話題が集まりました。重要な示唆に富んだものばかりです。これからも、この分野に、それからさらに人文科学的なアプローチにも注目したいと思います。



発行人
ESTABLISHMENT OF TROPICAL MARINE ECOLOGICAL RESEARCH

財団法人熱帯海洋生態研究振興財団

〒141-0031 東京都品川区西五反田1-26-2 五反田サンハイツ614号 TEL. & FAX. 03-3490-7266

AKAJIMA MARINE SCIENCE LABORATORY

阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179 TEL. 098-987-2304 FAX. 098-987-2875
E-mail: amsl@ryukyu.ne.jp Homepage URL: <http://www.amsl.or.jp>